

第9回ESD連続セミナー概要報告

奈良教育大学 大西 浩明

◇実施日時	2023 年 12 月 5 日（火）19 時～21 時
◇方法	ZOOM によるオンライン開催
◇参加者数	36 名
◇内容	学習指導案の相互検討②

【ルーム1】ファシリテーター：中村友弥（奈良市立朱雀小学校）

1）原田龍ノ助先生（奈良市立朱雀小学校）

小学校3年 社会科「おそろしい火事からくらしを守ろう」

子どもにとって火事はイメージしにくい

火事の原因を考えさせる → 火事が起きたとき、助けてくれるのは・・・

消防士だけでなく 消防団の人、自治会の人、警察の人など

「火が消えた後はどのように過ごしたらよいか？」

消防署見学・・・消防士さんたちの苦労や工夫

「自分たちにできる火災予防は？」 家族とも確認 → 記事にして地域に発信（火災予防マップ）

意見交流から

- ・他学年にも発信した方がよいのではないか。
- ・火事が起こったときだけでなく、事前・事後に焦点をあてているのがいいと思う。
- ・地域の誰に向けて発信するのかによって内容が変わってくるのではないかな。
- ・「正しく怖がる」ことをどれだけ実感できるかが大事だと思う。
- ・もし消防署見学ができないのなら、リモートでつながることで対応できると思う。

2）臼井達也さん（NPO 法人わかやま環境ネットワーク）

高校1年生 総合的な探究の時間「地域の空き家&店舗の利用価値の創造」

和歌山県立箕島高等学校で2021年から導入されているSDGsベースの教育プログラム

「まちづくり」というテーマから、毎日通っている学校の周辺地域について目を向ける

空き家、空き店舗に着目

空き店舗の改修に向けて、希望やアイデアを創出

→ 専門家を講師に招き、ヒントを得ながら改修を計画 提案・発表

この1年だけではできない 来年度以降へのステップ

意見交流から

- ・最終的にデザインをどのように決定していくのか。
→ 予算のこともあるので、そこが最大の悩み。でも、生徒の意思は極力尊重していきたい。
- ・地域の課題やニーズは違うので、それが明らかになればコンセンサスは図れるのでは。
- ・発表会でいろんな人からコメントをもらえるのがいい。
- ・もし今年採用されなかったアイデアも、次の1年生が引き継げるものがあると思う。
- ・高校生のこの段階で、こういう社会参画ができることは大きな学びだと思う。

3) 窪田あずさ先生（屋久島町立安房小学校）

小学校3年 総合的な学習の時間「わたしたちのまち ～安房地域の秘密を探り、守ろう～」

自分たちの地域の課題を見つけ、課題解決を図れる児童の育成を目指す

安房のお茶を取り上げてみた 鹿児島のお茶は有名だが屋久島のお茶はそれほどではなお
如竹先生の教えについても今年もやっている

お茶工場では、「そんなに人手はいらない」と言われ、少し困っている

意見交流から

- ・課題ではなく、強みやこだわりにフォーカスしてもいいのでは。
- ・人手はいらないと言えども、安房のお茶づくりへの思いについて触れられればいいのでは。
- ・次の働き手がいないと困るのではないだろうか。そこが考えるポイントかも。
- ・如竹踊りと何かタイアップできたらおもしろいが、できないだろうか。

【ルーム2】ファシリテーター：新宮済（奈良女子高等学校）

1) 坂元達哉先生（屋久島町立神山小学校）

小学校6年 総合的な学習の時間「生かそう屋久島のみ力 創ろう私たちの未来」

屋久島をより良い場所にしていきたいという強い思いをもっている。このことから、SDGs 達成のための取り組みを行っている。「使わない部屋の電気を消そう！」などのポスター掲示を学校で行っている。

その一つの取り組みとして、5年生の総合的な学習の時間に、屋久島の伝統野菜である「かわひこ」を島内の耕作放棄地で育てる活動を計画している。

意見交流から

- ・耕作放棄地問題は、どうしても解決しにくい
- ・児童が屋久島を大事に思っているからこそこういう実践ができる
- ・耕作放棄地に目を向けた子供たちがすごい。子どもたちの行動が、大人を変えていく
- ・発信として子供たちの意見を行政に伝えられると良い
- ・屋久島の耕作放棄地を解決するために活動している団体がたくさん存在する。
→ 続的方法を教えてもらえる可能性がある。地域に良い人材がいる可能性もある
- ・地域や中学生を巻き込んで芋煮会ができそう。
→ 毎年収穫祭をしたら、地域に受け入れられて楽しい行事になりそう。
今年度は植えて終わりにになってしまうが、地域になったら中学生も巻き込みやすい
- ・農地があつたらいいことがある、多くの役割がある（気温・生き物）ことに気づかせることが大切。
そういったことを教えるために、耕作放棄地マップを作成できそう。そのマップを知らせるときに芋煮会を実施すれば、発信しやすいかもしれない。
- ・地域を巻き込んだカワヒコを広げる催しをすることで耕作放棄地を減らす。
→ 持続性を持った活動にするため、長期的な目で見て目的のために適切な手段を考える。

2) 西田生先生（白浜町立日置小学校） 小学校5年 家庭科「食べて元気！ご飯とおみそ汁」

みそ汁には、家庭によって具材の差がある → そこから、地域の食材や旬の食材に目を向ける
家の人に聞いて我が家の味噌汁を学ぶ。

栄養士から給食の味噌汁を知る。調理実習で味噌汁を作る。

最後には、自分の家でみそ汁を家で作りたいと児童に思ってもらいたい。

意見交流から

- ・地域の素材を生かすことができそう。
- ・他の地域のみそ汁の具材を紹介するのも良いかもしれない。
- ・地域の人を巻き込んだ指導案だが、現在の小学校と地域とのかかわりは？
→稲作体験を地域の人としたり、海岸の清掃活動を行ったりしている。
- ・この指導案で考えられそうな ESD の観点 → 漁師汁でガラを使う。使う責任
- ・味噌汁について話し合う活動を加える。
- ・家庭の味噌汁の具材から多様性を感じる。地域性や家庭の味 → 地元への着眼点

3) 住田新太郎先生（松山市立中島小学校）

小学校3・4年 総合的な学習の時間「磯の博士になろう」

教材観：愛媛県の中島は、みかんの島。養殖漁業。

1 学期 海の生物を調べる

2 学期 海の環境を壊す、マイクロプラの問題について学んだ。海岸を訪れると実際にプラスチックがあることを実感。大学生が授業協力して、漂着物をアート作品にする活動。

2、3 月に「スポゴミ W 杯 2023」を実施予定

→拾ったらポイントをもらえる。スポーツと社会奉仕活動の掛け算

意見交流から

- ・勤務地の白浜でも海岸掃除を地域が中心となって行っている。しかし、参加者がしたくてしているのかは疑問。
- ・海から遠い場所で海に関する実践したが、自分事化させる過程で悩んだ経験がある。松山では海の問題を自分事化出来ているか？
→海は児童の生活に溶け込んでいるが、意欲をもって清掃活動に参加できているようには思わない。
だからこそ、2 学期にゴミではなく、材料集めとして清掃活動を捉え直した。
- ・海のすばらしさや豊かさが分かっているはずなのに、ゴミ問題に当事者意識が高まらないのはなぜ？
→ゴミ拾いがみんなのためになっているというのが理解できていない。悪影響を自分事にできていないのかもしれない。問題解決に向けての意識を高めていけられるようにする必要あり。
- ・海に親しむ→海を分析することができれば学びが深まるかもしれない。
奈良の小学校で海の実践をした際は、海洋ゴミの自分事化が難しかったが、実際に海に近い中学校の生徒が魚を分解したところ、本当に魚からプラが出たのをオンライン交流で知って、海のゴミ問題に実感を持っている児童が多かった。
→屋久島の 4 年生とのオンライン交流が実施可能かもしれない。

【ルーム 3】ファシリテーター：河野晋也（大分大学）

1) 田坂一稀先生（長浜市立長浜北小学校） 中学校 1 年 技術・家庭科（技術分野）

「持続可能な材料『竹』について考える ～竹灯籠の製作を通して～」

竹材に着目し、環境にやさしい材料を使用した製品を製作する。竹は、かつて里山の中で、たくさん活用されてきたが、近年では、里山が荒廃し放置林として問題視されることが多い。竹を活用する方法を考えたり、実際に竹を材料にして製作したりすることを通して、竹材料の良さや課題に気付

いていくことができる。セミナーでは、材料そのものの良さだけでなく、里山という周辺地域の持続可能性を考える上でも、優れた題材であるという意見が述べられた。授業者も、制作するだけでなく、使用済みの竹材を竹炭として使用することを活動に組み込む予定をしており、様々な観点から持続可能性について考えられる教材だといえる。竹材は購入する予定であったが、地域にも竹林があるとのことなので、荒れている竹林に実際にいって課題を見つけたり、放置されている竹を使わせてもらったり、地域の方から昔の竹製品について話を聞くなどすることで、課題意識も明確になることが提案された。

2) 井阪愛子先生（平群町立平群中学校）

中学校3年 総合的な学習の時間「修学旅行を機会とした平和学習」

修学旅行を機会とした平和学習を通して、沖縄戦での年代の若者たちのことを「我がこと」として考え、平和学習をそれぞれが課題意識を持って探究すること、そして自分の生き方について考えが深まることをねらって構想・実践した。課題解決をめざす「探究」を通して、自己の在り方をみつけていく「探求」を総合的な学習の時間に位置付け、後輩たちに学んだことを発表したり、自分の生き方を見つめなおす時間を設けたりした。学徒隊の姿を通して、悲惨な状況下であっても、あきらめずに生きようとする姿に気付かせようとしており、平和学習としての探究にとどまらず、子どもたちが自身のこれからの在り方についてフォーカスできるよう、単元構成がされていた。

3) 弓削直斗先生（長浜市立塩津小学校）

小学校3学年 総合的な学習の時間「見つけよう伝えよう 塩津の宝物」

子どもたちは、1学期に、近くを流れる川の調査を行い、その美しさに地域の良さを感じていた。2学期には、1学期の学習を踏まえ、川以外にどんな良さが地域にあるのかを探る活動を行った。それぞれの児童が知っている町の良さを共有したり、道の駅の見学をしたりして、塩津の良さを再発見していき、タブレットを用いて保護者や地域の方へ向けて発表する取組を行った。学習を通して、地域の一員としての自覚を持たせようとした。きれいな川が流れているということについて、子どもたちは普段から見ているにもかかわらず、それまでは気付いていない。当たり前のようにある光景について、新しい視点で見直すことができたことが、まず成果として挙げられる。また、子どもたちが、地域を新鮮な目で見て地域に発信することで、その発表を聞いた大人たちも、普段意識しない良さに改めて気付くことができる。

【ルーム4】ファシリテーター：加藤久雄（奈良教育大学）

1) 藤岡晃弘先生（奈良市立三碓小学校） 小学校5年 総合的な学習の時間

「わたしたちの住む三碓のたからものはなんだろう。～見つけよう！三碓遺産～」

世界遺産のない地域での世界遺産学習

昨年の反省から・・・世界遺産をもっと身近に感じてほしい！

世界遺産の登録基準について調べ、自分たちで地域の遺産の登録基準を考える

現地学習+ボランティアガイドさんとの交流 「守ろう 地球のたからもの」を使用

意見交流から

・奈良の世界遺産の登録基準とは？

→主に歴史的な視点で登録されている。

- ・子どもたちもそれについては納得している？
→自分たちの地域に歴史的なものが少ないので悩んでいる部分でもある。
- ・世界遺産学習を通してどのように自分たちの地域のよさに結びつけるか。
- ・地域の遺産として歴史的なものは少ない。
なんで自分たちの地域にある寺は世界遺産にならないのか？と子どもたちから出てくればおもしろくなりそう。
- ・まず教師がモデルとして地域の遺産を紹介してあげると、冬休みに探そうという意欲につながったり、探すための視点にもなったりする
- ・発表先についての工夫はなにかあるか（やる気を引き出す効果！）

2) 三上凜矩先生（山形市立第三中学校）

中学校2年 音楽科「郷土に伝わる民謡のよさを考えよう（花笠音頭）」

ねらい：花笠音頭が引き継がれこれからも受け継いでいこうという心を育みたい
歌詞から広げていく 「なぜ花笠音頭は引き継がれていったのだろうか」
花笠音頭の文化的・歴史的価値に気付くためにインタビュー活動もする
音楽としての民謡の良さに気付く

意見交流から

- ・生徒がどんな姿になってほしいのか？
→花笠音頭はきっかけで、生徒には文化を引きつぐのは大事なんだという感性を育みたい。
- ・花笠祭りの起源は？
→水田の工事で呼吸を合わせるために歌になった。
→初めの形とは違う。
- ・コロナ禍で中止になった祭りが多々あった中で、また復活したのはなぜかという視点で深めてもいいのでは。
- ・有形固定資産と無形文化遺産の起源について注目する。
- ・音楽の授業としてはどうだろうか？ 社会科と教科を横断してみてもどうか

3) 宮崎貴臣先生（菊池市立第菊池北中学校） 中学校3年 社会科「地方自治と私たち」

もっと菊池市を住みよい町にするのはどうすればいいのかを考えるを通して、自分たちの地域について改めて見つめ直し、主体的に政治に参加しようとする生徒を育みたい
ワークシートを活用して、地域の課題やよさを見出していく
生徒たちがまとめたものを企画書として行政に提出する
菊池市は多様な人たちが住んでおり、その中で生きる市民の一人としてしっかり考えてほしい
市の政策課には校内発表の時に来てもらい、講評をいただく形を2年前から続けている

意見交流から

- ・去年との違いは？
→二年前、地域の方を入れずにやってみると、突拍子もない案が出てきたが、去年は地域の方を入れると発想が凝り固まってしまった。
- ・自分との生活が密接にかかわっているのが面白そう。
- ・生徒の発想力を大切にしたい。

- ・事前アンケートと実践後のアンケートをとってみると、政治に関する視点で変容を評価することができる。
- ・ヒマワリシートがいろんな教科でも使用することができる。
- ・中学校3年生でも政治に関する意識は少ない

【ルーム5】ファシリテーター：圓山裕史（奈良市立伏見小学校）

1）川邊甲余子先生（奈良市立伏見小学校） 小学校2年 生活科「未来からくりおもちゃ館」

生活科の目標から、試行錯誤し、楽しんで活動することをめあてとする。

→「失敗をたくさんしよう」「実際に遊びながら」といったことを大切にしている。

からくりおもちゃとは、江戸時代から現在も残されている、自然素材を活かしたおもちゃであり、ゲーム機で遊ぶことが多い児童にとって馴染みは薄いですが、様々な工夫やしかけからたくさん学んでほしい。

導入段階で「ならまちからくりおもちゃ館」の館長から、残していこうという思いを聞いたり、からくりおもちゃの仕組みを予想したり、実際にからくりおもちゃに触れる活動を取り入れた。そうしたことから、からくりおもちゃを残していこうという館長の気持ちを考えたり、自分たちも作ってみたいという気持ちを持ったりすることができた。

自然素材の利用は難しかったので、空き箱などを使って作っていった。また実際に触れた、からくりおもちゃのきれいな見た目も意識して、テープをなるべく使わないとか、接着面が見えないようにといったことも意識しておもちゃ制作に取り組んでいる。

毎回ふりかえりを書いて残すことで、作業したことを言語化し、思いを共有することもできている。校内の作品展での展示を来週に行うが、作り手の想いを伝えるために使い方の説明も作成している。国語科の「馬のおもちゃ」とも関連させて、書き方を指導している。作品展のルールとしては、手にとって遊んでもらうことはできないが、遊んでもらってなんぼなところもあるので、自分たちが見ているところで遊んでもらいたい。

意見交流から

- ・実際に見たり聞いたりといった活動が、館長の熱い思いやおもちゃに対しても身近に感じるためにいいと思う。
- ・使い方の説明で国語科との関連を意識されていていい。
- ・次年度へ続いていくといい。
- ・作品展では難しいかもしれないが、ぜひ、自分たちの目の前で触れてもらえる機会を作ってみてください。
- ・実際に遊びながら、「友だちが作ったものだから大事にしたい」と感じられているのがいい。
- ・試行錯誤しながら、おもちゃのしくみを考えたり、創意工夫して多様なおもちゃを楽しみながら作ったりしている活動になっているので、多様性やシステムズシンキング、すすんで取り組む態度に重きを置いていいのではないかな。そこから、「残していこう」という思いが生まれ、文化尊重や世代間公正の価値観が芽生えるといったイメージにする方がいいのかもしれない。

2）田中絃太郎先生（長浜市立速水小学校）

小学校3年 総合的な学習の時間「大豆はかせになろう ー大豆と食文化ー」

速水小学校では、地域の農家の方や JA の方、保護者との協力で大豆を栽培→収穫→加工（豆腐づく

り)といった活動をしている。地域との協力を大切にして活動させていく。

大豆は食品として様々に形を変えて食生活に関わるだけでなく、環境改善の側面もあり、その多様性について国語科の「すがたを変える大豆」とも関連させながら、調べ学習をすすめる。最後には調べたことについての発表の場を考えている。

畑が校内にあるわけではなく、農家の方の畑で栽培していただいているので、「育てている自覚」を持たすためにも定期的に観察に行き、記録を残していくことを大切にしている。

多様性(大豆の)と自然環境・生態系の保全を重視する価値観を主に考えている。

意見交流から

- ・発表会が農家の人やJAの人など、協力した地域の人にも聞いていただけたらいいと思う。
- ・大豆の環境改善とは具体的にどんなものがあるのか?
 - 大豆油から液体燃料や車の部品になったりということがある。また、「大豆ミート」は大豆をもとにした肉のように見立てた加工食品であり、健康食として注目されるが、牛を育てるための穀物の量を考えると、採れた大豆の分だけ「大豆ミート」になるので、環境に良いということ。
 - 大豆油からの液体燃料が実際にどれぐらい利用されているのか、車の部品となっていることはメーカーからの話が聞けるといいのではないかな。
- ・豆腐づくりはすごく魅力的な活動であるが、アレルギーなどの心配は大丈夫か?
- ・大豆は輸入に頼っている食品であるが、そういったことに関しては
- ・湖北地方には、大豆を潰して汁にいれるような郷土料理が給食に出てくると聞いたことがあるし、長浜には「なかや」という有名そうな豆腐屋があるようで、そこにも豆腐田楽が郷土料理として紹介されていた大豆づくりがさかんな地域だったのではないかな?

3) 橋口和真先生(屋久島町立八幡小学校) 小学校3・4年複式 総合的な学習の時間

3年「発見、発信、屋久島の自然」4年「自然を守る取り組みを考え、発信しよう」

海のレンジャー体験と山のレンジャー体験をアクティブレンジャーの方々と体験し、子どもレンジャーとしてどんなことができるかを考える。児童の半数は移住してきた家庭の児童で、自然を満喫した生活を送っている中で、「豊かな自然が当たり前」だと感じている中で、クリティカルに感じられるようにしたい。

海のレンジャー体験では、屋久島の海のいいところ(多様な生態系があるなど)と困っていること(ゴミが流れ着いてしまっている)などを感じられる活動を行い、山のレンジャー体験では、調べ学習として、妖怪、外来種、ヤクザル、ヤクシカなどのテーマを決めて調べ学習を行う。また、ヤクタネゴヨウという絶滅危惧種であるマツの保全活動を見学し、プロの保全活動と自分たちの活動との比較から、活動の充実を図る。

SWOT分析を利用し、もともとの弱みに対しての解決方法などを考えていきたいが、分析のいい方法があったら教えてほしい。

相互性(屋久島の自然や動植物の関係)、島に住むものとしての責任性、世代間公正(残していきたい)など

意見交流から

- ・ヤクシカの増加で食害が出ているという課題について、猟師さんからの話を聞くこともいいかもしれないし、奈良もシカについては同じような課題があるが、屋久島では焼肉屋さんや飲食店でシカ肉が食材として当たり前のようにある。観光客へのアピールでシカ肉の消費を増やすことができるのでは

ないか。

- ・「問いづくり」をしていくことで生まれてくるかもしれない。
- ・SWOT 分析では、4つのエリアの付箋を違う色で書かせて、それらを動かしながら、なぜ疑問の形 (what, why)で問いづくりをしていくといいのではないか。